

[様式14]

(対象事業：1. 子どもを対象とした事業及びその開発にかかる事業)

事業名：京都文化博物館地域子ども教室活動事業

事業者名：財団法人 京都文化財団

連携事業館名：京都市立京都御池中学校、京都市立高倉小学校、同 御所南小学校、京都紋章工芸協同組合、三条通まちづくり推進会議、歩いて暮らせるまちづくり推進会議、文友会

住所：京都市中京区高倉通三条上る東片町 623-1

TEL：075-222-0888

FAX：075-222-0889

HPアドレス：www.bunpaku.or.jp



①施設概要

京都文化博物館は、京都の歴史と文化が通覧できる歴史博物館、京都ゆかりの美術作家の作品を展示する美術館、日本映画のフィルムライブラリーセンターの3つの機能を持った「常設展」、さまざまな「特別展」を開催。重要文化財の別館（旧日本銀行京都支店）を広く公開・活用している。さらに「貸展示室」や江戸時代末期の京の町家の表構えを復元した「ろうじ店舗」があり、まちなかの文化・観光施設としての機能を持つ。

②事業の意図目的

京都文化をテーマとした芸術文化活動を通して地域理解を進めるフィールドミュージアムの拠点として、継続的な教育普及活動を行っている。この事業では、博物館が地域で子どもを育て守るという活動の中心になること。博物館に対する地域住民の関心を喚起し、地域の再生、活性化の動きに積極的に働きかけていくことが目的である。

③事業概要

1) “ぶんぱく”と一緒にわたしたちのまちを探検しよう

●平安京探検 ●三条通り子どもクイズラリー

2) “ぶんぱく”を通してさまざまな世界を探検しよう

●自分のアートを作る！ ●発見！映画の玉手箱

3) “ぶんぱく”を探検しよう

●校倉造り体験 ●家紋体験 ●館内探検ツアー

④事業の製作物及び報告書等

事業の製作物 テキスト ワークシート その他（ファイル式ワークシート）
作成した報告書等 冊子（ ）
その他（折り紙建築 十二単重さ体験着物）

⑤参加者状況

参加者人数：延べ267人

内訳：子供126人（幼児2人・小学生117人・中学生5人・高校生2人）大人141人

(1) 事業の実施状況について

3つのテーマと目的を設けて実施した。それぞれの事業概要は以下のとおりである。

I “ぶんぱく”と一緒にわたしたちのまちを探検しよう

“ぶんぱく”を中心とした地域にはいくつものまちが重なっている。歴史的特徴である三条通りを中心とした界限。旧都心のまちなか地域、京都市内およびその周辺地域である。それぞれにわたしたちに関連したまちがある。京都の産業、歴史、まちなみや建物、人、祭りなどの行事、地理や自然などを、身近なテーマを入口として探検を続けていく。

①平安京探検 平成19年11月17日（土）実施

まちなかを歩く日（11月17日・18日）にあわせ、館がおこなった発掘調査地を巡りながら、平安時代からのまちの変遷を探検。

②こどもクイズラリー 平成19年11月18日（日）実施

歩いて暮らせるまちづくり推進会議が主催する「京のまちなかを歩く日」の活動のひとつ。クイズに答え、町の方に話を聞きながら三条通りの隠れた名所を探検。三条通りまちづくり委員会の協力。当日まちなかを回遊する人々にマップを約200枚を配布した。



平安京探検の様子



こどもクイズラリー（こんなところに地下室発見）

③家紋体験 平成20年1月26日（土）実施

家紋という日本の伝統文化を普及・啓発していく活動。文様の割付という子どもが楽しみやすいプログラムを行い、最近急速に忘れ去られていく家紋についての関心を持ってもらう。



家紋体験「家紋を描く」

Ⅱ “ぶんぱく”を通してさまざまな世界を探検しよう

“ぶんぱく”には歴史・考古、美術・工芸、映像・情報を専門とする多くの学芸員がいる。そして、一年を通してさまざまな特別展が開催されている。京都が持つ国際性を紹介する活動として、京都文化だけに限らず世界の文化も対象とする。この“探検”では、学芸員の専門分野や展覧会に関連した活動、外国との交流をテーマとした活動を行う。

①風船アート@ぶんぱく別館 平成20年1月12日（土）実施

ぶんぱく別館は、築102年となる旧日本銀行京都支店の建物で、国の重要文化財に指定されている。また三条通りを代表する明治建築であり、この100年前の建物をアートな空間にしようというのが今回の狙いである。

当館美術担当学芸員とインスタレーション作家であり芸術大教授の二人の指導のもと、風船2000個を膨らませ、床一面に並べ、風船スクリーンを作り、そこに参加者がそれぞれ博物館の中を見てまわり、自分の気に入ったものをビデオ撮影し、風船に映し出た。

②発見！映画の玉手箱 平成20年1月20日（日）・2月3日（日）2月17日（日）実施

京都の重要な文化産業である映画の関係者との連携という意味において、今回は実験的な活動であったが、参加者の反応や協力いただいた方々の意思は非常に好意的かつ積極的であったと感じている。京都の映画に関するさまざまなネットワークとの連携が今後考えられるということで、今後もプログラムの内容や運営を充実させていきたい。



発見！映画の玉手箱



Ⅲ “ぶんぱく”を探検しよう

“ぶんぱく”京都文化博物館そのものを知ってもらう活動。展示だけでなく、施設や学芸員など博物館で働く人を通して、博物館を探検する。

①校倉造り体験 平成19年12月8日（土）実施

2階の歴史展示室「匠の世界」に展示してあった「新校倉造り」（文友会・木澤工務店協力）を一端、解体して中庭で子どもたちと一緒に組み立てる活動。



校倉造り体験

②館内探検ツアー 平成20年2月9日（土）実施

博物館の役割や構造は？ 働いている人ってどんな人？ 日ごろ見ることのできないところを探検し、クイズで楽しみながら博物館を回る。とくに参加者がチームになってクイズの答えを探して館内をぐるぐる探検する活動は、遊びながら博物館を学ぶという楽しい企画。

（2）地域との連携について

大きくわけて3つのカウンターパートとの連携を作ることができた。

一つは、京のまちなかの8学区の自治団体、まちづくり委員会、商店街、NPO法人などのグループ、団体で構成されている「歩いて暮らせるまちづくり推進会議」である。さらに博物館別館が面している三条通りに関連して、三条通りまちづくり委員会も推進会議のメンバーであり、「歩いて暮らせるまちづくり推進会議」が毎年おこなっている「まちなかを歩く日」のイベントでは、まちの方に「お話人」をお願いし、まちの内緒話を聞かせていただいたり、まちなかクイズを実施することで、三条通りと一体となった活動が展開できた。

二つ目は、博物館の常設展示室の展示事業に関連してお世話になっている京都の伝統産業関係の方々である。文友会（京都の社寺建築に関連した事業を展開するさまざまな業種の団体などが参加）は、京都文化の保護者・育成者のひとつであり、こうした方々の匠の技と心を子どもたちに体験させることは、まちの歴史や文化に直接触れることのできる機会であり、地域産業との関係という点からも大変重要な活動と考える。

また、京都紋章工芸協同組合は、まちなかにある着物に関わる伝統産業のひとつとして、日ごろから家紋の継承、広報活動を進めておられる。今回は博物館との連携ということで新しい活動を企画・展開することになった。

そして、三つ目は、近隣の小中学校である。平成18年度からまちの有識者や学校の方々の協力を得て「ぶんぱく子ども教室実行委員会」を発足させており、この委員会を通して近隣の学校との関係した活動を進めていくことができた。とくに今回の事業の特徴として掲げた多年齢構成による活動※1が、博物館ならではの活動として評価を得た。

※1 小学校低学年～中学生まで、多年齢で構成される活動を継続的に行う方法。通常の学校や家庭生活の中で機会の少なくなってきた上下年齢交流の中で、「上が下の面倒をみる」「上を見習って下がルールを学ぶ」という経験を通して地域社会の一員としての自覚を持ってもらえるようにする。

(3) 成果物

I 活動の成果を蓄積していける仕組み：

①ファイル式ワークシート

“探検”と“継続”の“旅”を楽しんでいくために、参加した子どもたちそれぞれが活動をファイルしていけるようなワークシートを準備。活動別にファイルし、蓄積していくことで、子ども自身が継続した活動の成果を実感することができるようにする。将来は「ぶんぱく子どもクラブ」活動へつなげていく。

II 地域の文化資産を生かした教材制作：

①折り紙建築

旧日本銀行京都支店の建物で国の重要文化財に指定されている京都文化博物館別館は、たくさんの近代建築が残る三条通りの中でも中心的な建物であり、まちの方々に開かれた博物館の顔である。こうした建物の折り紙建築をとおして明治の近代建築だけでなく、三条通の歴史、まちの移り変わり、守るべきまちの景観に関心を持ってもらう。

②十二単重さ体感

歴史展示室の展示物を活用した体験グッズとして、平安時代の十二単の重さを体験してもらう「十二単の重さ体感きもの」を製作。京都の重要な産業である着物の歴史を学ぶきっかけとし、着物への関心を高めたい。

(4) 参加者の反応

館内クイズラリー、風船アート以外の活動が、子どもだけの参加は難しく親子参加に留まったため、子どもだけの反応は担当の受け止めによるが、おおよそ以下のような反応をえた。

館内クイズラリーや映画教室のように、収蔵資料や学芸員の業務、あるいは日ごろ見ることのできない博物館の内部施設、例えば学芸員の部屋、中央監視室（設備関係）、フィルム収蔵庫、大型エレベーターなど見学し、さらに自由に博物館施設を廻ることができるということで参加者が大変喜んでいて。たとえば以下のようなアンケート回答があった。

- フィルムに直接絵をかくのが楽しかった。
- 収蔵庫に入ってフィルムを寒いところで保存しなければならないことを初めて知った。
- 活弁をはじめて見たが、とてもおもしろかった。普段なかなか見られないものがみられてよかった。
- 活弁は文化財なのだと認識を新たにした。このような試みが今後も継続してほしい。
- 以前から興味があったので、今日偶然参加できてよかった
- アニメーションの制作がこんなに手間がかかることをはじめて知った。

一方、館外に出て行く活動として、不特定多数が参加できたラリーマップは、当日三条通りを歩いていた親子およそ 200 名に配布しており、ラリー参加ゴール以外の人にも三条通りのおもしろさを普及できたと考える。また、家族で楽しめるプログラムとしての可能性を感じた。まちの景観に関心を持ち、歴史を探検できる活動は評価が高かった。

また、体験する機会が少ない伝統建築そのものに触れることができた「校倉造り体験」は子どもだけでなく大人にも大変関心が高かった。同様に「家紋体験」は会場をロビーに設定したこともあって、子どもよりも大人が参加する姿が多く見られた。その中でも親子の中で家紋についてのやりとりが活発に行われており、専門家のアドバイスもかみあって、家紋の継承という意味においては大変効果があったと思う。

以上を振り返ると、最初に設定した 3 つの活動趣旨に沿った反応が得られたと考えており、活動の目的を明確にすることが重要であると再認識した。一方、活動を通して定量的な評価ができなかったことは反省点である。

(5) 芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

これについても 3 つの活動趣旨に沿った効果と、3 つのカウンターパートに応じた効果があった。

まちづくりなどの活動をされている方々と一緒になって実施した活動は、当初から意図したように「地域で子どもを守り育てる」というテーマと一致していたということで、来年度以降の継続を期待されている。さらに、地域の子どもたちがまち博物館を普段の生活の中で活用する方法と経験を蓄積しながら成長していけることの重要性とその可能性を、学校の先生方にも発信できたことが大きい。今後、この地域の小中学校では小中一貫教育という学校教育モデル事業が進められていくということもあって、博物館とのさらに密な連携を希望されている。

また、地域の伝統産業に関わる事業としては、単に伝統技術に触れることだけの効果ではなく、こうした匠の世界を広く発信・普及することは、後継者育成という意味からも効果がある。文友会はじめ関連産業の方々にも、活動の重要性を認識できたことで、今後も展示活動と連携した多様なプログラムの展開が期待できる。京のまちなかは、日本の伝統文化が息づくまちでもある。とくに着物に関する産業は、ある意味で京のまちなかの重要な景観を占めているとあって過言ではない。さらには「祇園祭」という伝統行事を支えている方々でもあり、こうした活動の延長に、京のまちなかミュージアムという姿が描けるということ、まちなかの方々や参加者に実感していただいたと思う。

今回の事業によって、博物館が掲げた 3 つのテーマと事業を通して連携を持つことができた 3 つの地域カウンターパートが、相互に関連しながら活動することの大切さを明らかにできたことが芸術拠点形成事業を実施した最大の効果である。博物館の持っている人材、方法がまちなか博物館構想に有効であると館内外に広く認識されたと自負している。